

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 塚本 聡

研究課題		英語史的コーパスを用いた言語変化の研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	英語は古英語以来多くの変化を受けている。特に、総合言語から分析言語へと変化したことは、英語に多くの影響を与え、多くの迂言的言語形式が生じている。これまでの研究により、英語における変化の多くは 200 年前後で収束している。使用増加が途中で変化し、使用が減少した関係代名詞 that および助動詞 shall に注目し、その変化に普遍性があるかどうかを研究した。 本研究では、英語史的コーパス (PPCME2, PPCEME, PPCMBE) を利用し、言語変化の速度を測定し、言語の有する性質を明らかにした。
	研究の結果	Tsukamoto (2020) の研究を発展させ、PPCME2, PPCEME, PPCBME を使用し、他の言語項目の変化速度を観察した。英語史上顕著な変化を経ている関係代名詞、および助動詞を調査した。 that については、外れ値となる 1350 年を除くと 1400 年から使用率が急増するが、1550 年からは逆に衰退する。 wh -関係詞は 1400 年頃から that と同様の増加がみられるが、その増加は 1650 年まで継続する。 will は 1375 年から増加し、1625 年頃には使用率が安定する。 shall は反対に 1400 年頃にピークを示すが、1725 年頃に衰退が安定化する。 can は 1400 年から使用率が増加し、1625 年頃に現代と変わらない使用率となり安定する。
	研究の考察・反省	that および shall の使用にみられるように、両者の語はいずれも現代では他の類後に比べると廃用とは言えないが、使用率は低い。 that の使用について興味深い点は、 wh -形関係代名詞と同様に、1400 年頃から使用の増加がみられるが (いずれも 1 万語あたり 20~60 回)、増加の 150 年後ころから衰退する。この現象は先の研究結果と同様に、使用の定着に約 200 年が必要であり、それより短期間での使用減が、現在の低頻度につながっている可能性を示唆している。助動詞の使用率の増加期間については先の研究成果と同一の傾向を示している。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究成果物 「構文解析コーパスによる格付与能力の検証—中英語 Double Object 生起からの推定」『英語コーパス研究シリーズ コーパスと英語史』 2019 年 4 月 26 日	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	The Time Span Required for Syntactic Changes in the History of English 『英語コーパス研究』第 26 号 2020 年 2 月 10 日	